

カントは『実用的見地における人間学』第二部の「A 個人の性格」において「(道徳的)性格 Charakter」を扱っている。道徳的教育における第一の努力は性格の確立であるという『教育学』における主張や、性格は尊厳をもつという『人間学』における主張を鑑みれば、一見すると性格概念は無視できない重要な役割を担っていると思われる。ところが、性格概念はこれまでのカント研究においてあまり注目されてきたとは言い難い。そこで本発表では、この性格概念について主に三つの問題を取り上げたい。

まず第一に、性格とは何か、と問われねばならない。例をあげればきりがないのでここでは差し控えるが、カントは性格を様々な言葉で定義しており、性格概念は実際には統一的特徴づけを与えるのが難しい概念であると言える。本発表では、他の類似概念との異同に注意を払いつつ、統一的な定義を試みる。

そして第二に、まず、時間を通じて形成することができるのか、と問われねばならない。カントは『純粹理性批判』や『単なる理性の限界内における宗教』において、彼の超越論的観念論の枠組みに従い、性格を経験的性格（現象）と叡智的性格（物自体）に区分している。その上でカントは、経験的性格は暫時的改革によって、叡智的性格は瞬時の革命によって確立されると指摘する。ところで、A. ショーペンハウアーやL. W. ベックは、叡智的性格が瞬時的な革命によってのみ獲得されるならば、時間を通じた性格の改変や道徳教育は不可能であると批判している（Schopenhauer[1839], Beck[1960] [1978]）。この批判に応答することなしに性格を論ずることは困難であろう。本発表では、晩年の性格概念と叡智的性格の差異に注意を払いながら、時間を通じた性格形成はカントの枠組みにおいても可能であると論ずる。

第三に、以上を踏まえて、性格はいかにして形成されるのか、と問うことができるだろう。カントは『人間学』『教育学』『人間学講義』『人間学のレフレクシオン』において、性格形成のための格率をいくつか定式化している。例えば、『教育学』においては、性格形成には「服従 (Gehorsam)」「誠実性 (Wahrhaftigkeit)」「社交性 (Geselligkeit)」が必要であると指摘されている。本発表では、いかにして性格は形成されるかという問いに対してカントのテキストの解釈を通じて説得的な答えを見出す。

以上によって、晩年の著作におけるカントの生身の人間像が垣間見えるであろう。それは批判期における「理性的存在者一般」ではなく、理性と感性を併せ持った、まさに中間的存在者としての人間である。